

[特別展]

瀧口修造の造形的実験

Shuzo Takiguchi: Plastic Experiments

2001年12月4日(火)ー2002年1月27日(日)

開館時間=午前9時ー午後5時(入館は午後4時30分まで)

December 4, 2001 - January 27, 2002

休館日=月曜日、祝日の翌日、年末年始[12月10日(月)、17日(月)、25日(火)/12月29日(土)ー1月3日(木)/1月7日(月)、15日(火)、21日(月)]

渋谷区立松濤美術館 The Shoto Museum of Art

入館料=一般300(240)円/小中学生100(80)円

*()内は10名以上の団体料金 65歳以上の方および障害者の方は無料/第二、第四土曜日は小中学生無料



描く瀧口修造 『藝術新潮』137号 1961年5月より/撮影:野中昭夫



瀧口修造 作 デカルコマニー (制作年不詳)

本展は、瀧口修造(1903-1979)の、文字によらない表現行為を紹介するものです。

瀧口は1920年代後半から、詩作、シュルレアリスムの紹介、美術評論など、多面的な文筆活動を始めました。『瀧口修造の詩的実験 1927-1937』(1967)は、初期の仕事をまとめて30年後に出版された、彼の主著のひとつです。瀧口が戦後も詩、美術、映画、写真、デザイン、舞踏など幅広いジャンルの前衛的な仕事に立ちあい続け、独自の批評行為を行ない、日本の文化の動向に深い影響を与えたことは、広く知られています。

ところが瀧口は1959年頃から「ジャーナリスティックな評論を書くことに障害を覚え」、エキリチュールの原点を模索しながらデッサンに着手します。瀧口は戦前にも試作していたデカルコマニー(転写技法)や焼き焦がし(バート・ドローイング)、本のオブジェといった、さまざまな表現手段を試み、1960年代前半を中心に、造形的な実験に没頭したのです。彼はこの成果の一部を個展などで発表する一方、親しい友人たちへの贈り物として捧げていました。

瀧口が後半生に心を注いだ、こうした言葉によらない表現行為は、通常美術作品とは異なった、独自の動機から作られたといえます。それが何だったのかを改めて問うことで、戦前、戦中、戦後をとおして瀧口が培った思想に、わたしたちも改めてアクセスすることができるのではないのでしょうか。

本展では、故綾子夫人が大切に保管されていた多数の未発表の制作物を中心に、300点余を展覧し、資料と共に瀧口修造の知られざる面を紹介しようとするものです。



《詩人の肖像》デカルコマニー 1962年



バート・ドローイング、煙、水彩



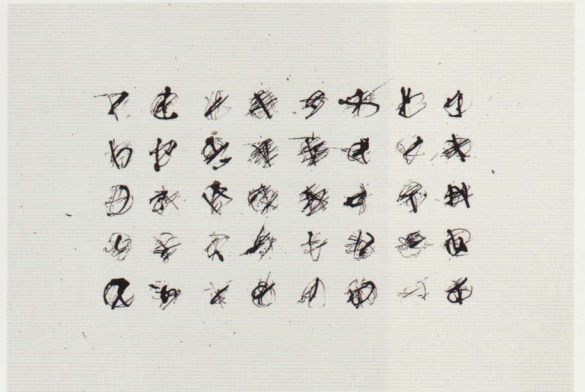
紙・インク、墨、水彩 1961年



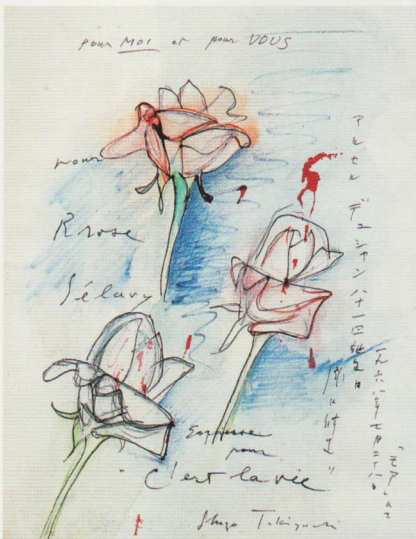
デカルコマニー (制作年不詳)



『SIX PAROLES DE SIX POETES VIS A VIS DE SIX IMAGES DE TAKIGUCHI SHUZO』 1963年



紙・インク 1960年



《ローズ・セラヴィのために》紙・インク、水彩、クレヨン 1968年

■講演会

12月8日(土) 午後2時より「瀧口修造の書くことと描くこと」
講師＝ヨシダ ヨシエ(美術評論家)

■美術映画会

12月9日(日) 午後2時より
「北斎」(1953年、勅使河原 宏監督)
「幕間」(1924年、ルネ・クレール 監督)

1月26日(土) 午後2時より
「北斎」(1953年、勅使河原 宏監督)
「ひとで」(1928年、マン・レイ 監督)

* 瀧口修造が1951年から脚本・構成を手掛けた美術映画「北斎」は、資金難のため中絶した。フィルムを受け継いだ青年ぶろくしょんは、「北斎」を瀧口の企画とは異なった形で、勅使河原宏第1回監督作品として完成させた。

■美術相談

12月22日(土) 午後2時より 講師＝遠藤原三(油彩)/北尾和子(水彩)
1月27日(日) 午後2時より 講師＝宮田翁輔(油彩)/新出紀久雄(水彩)

渋谷区立松濤美術館 The Shoto Museum of Art

渋谷区松濤2-14-14 Tel. 03-3465-9421

JR 渋谷駅下車徒歩15分/京王井の頭線[神泉]駅下車徒歩5分

